様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２３年５月２日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(A)
研究期間：2008～2012
課題番号：２０２４２００８
研究課題名（和文）　聴覚音声学と音韻構造の相互関係

研究課題名（英文）　Interaction between auditory phonetics and phonology

研究代表者
中川　裕（NAKAGAWA HIROSI）
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：７０２２７７５０

研究分野：言語学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：言語学、音声学

１．研究計画の概要
本研究はつぎの２点を目指している。
(1) 言語横断的手法を用いて、従来の研究では扱われなかった多様な言語の広範囲にわたる音範疇を対象として、聴覚・音響音声学的調査を実施し、音韻構造に関わる多くの聴覚・音響音声学的な新知見をもたらす。
(2) もたらされた豊富な新資料に基づき、音韻構造と聴覚・音響音声学的事実がいかなる関係にあるかという問題に実証的に取り組み、２つの方向をもつ学問的貢献を目指す：ひとつは、①音韻特徴（素性）理論の中に聴覚・音響音声学的知見をどのように位置づけるかという理論的問題に具体的解答を提案することであり、もう一つは、②言語学習の理論と実践に、実証的な聴覚音声学的知見を、どのように組み入れるかを考察することである。

２．研究の進捗状況
中国語（普通語）、上海語、日本語（韓国人学習者）、琉球方言（波照間、多良間、奄美大島）、ロシア語、インドネシア語、バリ語、ラオ語、コイサン諸語（グイ語とホアン語）を対象として、代表者、分担者、連携研究者、研究協力者の担当分担により、実験データやフィールドデータの収集と分析が進んでいる。また、日本語母語話者による学習言語としてのインドネシア語、カンボジア語、中国語、ラオ語および、韓国語話者による学習言語としての日本語における発音習得の問題点を聴覚音声学的な視点から探る報告会やシンポジウムを開き、討議をすすめている。
　分節音に関しては、子音の領域でコイサン語を素材とする子音の２大クラス（クリックと非クリック）の統合的取扱いと横断的分類のための音響・聴覚的特徴にかんする成果がえられた。また有声性と破擦性・摩擦性の相互作用にかかわるロシア語と日本語の聴覚音声学的事実の違いについての新知見もえられた。聴覚的母音空間に関して、インドネシア語、バリ語をもちいた調査研究の成果も蓄積されてきた。
プロソディ特徴については、とくにラオ語の声調に関する調査と、上海語の声調交替に関する調査が進展した。さらに中国語（普通語）のストレスにかかわる聴覚的実体をさぐる調査も進んでいる。プロソディ特徴と分節音的特徴の相互作用を扱う韓国人学習者の日本語の有声性とピッチの関係を、聴覚音声学および音響音声学の手法をもちいて探求する下位プロジェクトも具体的な成果がではじめている。
今後はこれらの知見を総括する音響・聴覚音声学的特徴の体系の考察をすすめることになる。

３．現在までの達成度
②おおむね順調に進展している。
ほぼ計画どおりに進行中であり、実証的なデータとその分析結果による知見の蓄積は期待通りの達成をしている。１(2)①で述べた音韻特徴理論における聴覚・音響音声学的知見の位置づけについては、声調（とくに曲線声調）の聴覚的素性の設定についてラオ語事例研究が議論の展開に貢献しそうである。コイサン語資料が提起する２大子音クラス（click vs. non-click）についても新たな提案ができる見込みである。(2)②に述べた応用研究は、今年度のシンポジウムでの討議によって重要な問題がいくつも明らかになり、とくに調音的類似性だけでなく、聴覚的類似性が学習の困難点の理解にとって本質

的であること、したがってその組織的調査と蓄積が必要であることが認識された。

４．今後の研究の推進方策
実証的データの蓄積は、今後も続けることになる。聴覚・音響音声学的特徴の音韻素性理論にどのように位置づけるかという理論的問題の探求は、ブレヴィンスの進化音韻論やミルケの発生的素性のあたらしい見解を踏まえながら、今年度の後半から研究会を開き、これまで本研究によってえられた知見を再考察してみる。応用的研究の総括は、研究分担者の佐野洋を中心に今年度いっぱいで、研究成果の公開の準備をすすめる。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 22 件）
①Nakagawa, Hirosi (2011) “A first report on G|ui Ideophones” In Hieda, O., C. Koenig, and H. Nakagawa (eds.) *Geographical Typology and Linguistic Area- with Special Reference to Africa. vol. 3.* John Benjamin, 270-286, 査読有
②髙橋康徳(2011)「中国語（普通話）の無軽音２音節語の語ストレス：聴覚音声学からの知見」『コーパスに基づく言語教育研究報告』6, 27-44, 査読有
③鈴木玲子(2010)「ラオス語教育における発音指導要領の紹介」『外国語教育研究』13, 122-129, 査読無
④原真由子(2010)「聴覚音声学的実験に基づくバリ語平地方言の/*/の解釈(*はシュワーの音声記号)」『大阪大学世界言語研究センター論集』3、247-260, 査読有
⑤金愛子(2009)「韓国語 2 方言話者による日本語破裂音の聴覚的認識」, シリーズ言語学と言語教育 19『日本語教育学研究への展望-柏崎雅世教授退官記念論集』, 5-24, 査読有

〔学会発表〕（計 34 件）
①Nakagawa, Hirosi “Phonotactic constraints of roots in G|ui”, The World Congress of African Linguistics 6, August 17-21, 2009, Cologne, Germany.
②柳村裕「ラオ語ビエンチャン方言の声調の音声変異：隣接声調間の影響」第 23 回日本音声学会, 2009 年 9 月 27 日, 九州大学
③柳村裕「ラオ語ビエンチャン方言の声調の聴覚音声学的分析」日本音声学会第 22 回全国大会, 2008 年 9 月 15 日, 明海大学

〔図書〕（計 3 件）
①Osamu Hieda, Christa Koenig, and Hirosi Nakagawa (eds.) *Geographical Typology of African Languages*. 2011, John Benjamin.

②鈴木玲子『ニューエクスプレス　ラオス語』, 白水社, 2010 年, 156 頁